

## 施設利用高齢者と介護職員によるライフレビュー面接の一考察

小亀未於

(香川大学大学院医学系研究科)

## 問題と目的

Butler (1963) は、死を前にした高齢者やターミナル期の患者にみられる人生の回顧現象をライフレビュー (life review) と名付けた。従来のライフレビュー研究は、多様な尺度を介入前後で比較した効果研究が主であり、ライフレビュー・プロセスに着目したものは非常に少ない。そこで、本研究は、施設利用高齢者に対して介護職員が聴き手となったライフレビューをもとに、ライフレビューの展開の過程を考察することを目的とする。

## 方法

**研究協力者** 介護施設より、抑うつや重度の認知症がなく疎通性が良好な利用者と、ライフレビューに関心がある介護職員を紹介していただき、研究趣旨を文書と口頭で説明の上、承諾の得られた方を研究協力者とした。

**手続き** ①フェイスシート。②介護職員に対する研修の実施。③利用者と介護職員によるライフレビュー面接の実施。2021年6月3日から2021年6月30日の間に、非構造的な個人ライフレビューを原則として週1回30分、計5回行った。

## 結果

90代男性のAさん(語り手)と、40代男性のBさん(聴き手)による面接経過である。語り手の言葉を「」, 聴き手の言葉を〈〉で示した。

**#1** 〈若い頃に頑張ったことは?〉妻や子どもとハイキングに行ったこと。「自分も元気になれるし、脚の力にもなる」。20代の頃に、ハイキンググループの中で妻と出会った。

**#2** 最も心に残っているのは、富士山に登ったこと。〈山登りをしたから、今でも足腰が強い〉。人生でやり残したことはない。「康寧な人生で、良いときも悪いときもむちゃくちゃじゃあ(笑)」。

**#3** 子どもを連れて、よく百貨店を訪れていた。品評会で珍しいものを見たり、店の前で政治の立会演説を聞いたりすることが楽しみであった。

**#4** 〈仕事は?〉税理士や労務士の仕事と、ビル

の管理を行っていた。〈ご自身が子どもの頃の思い出は?〉年末や正月にお八幡さんへお参りに行ったこと。「あの当時が懐かしい」。

**#5** ハイキングを通して、歩き疲れてもとにかく頑張らなければいけないという精神が養われた。お陰で、子どもは今でも根性がある。〈ハイキングが一番大切な思い出?〉「一番大切な」。

## 考察

回を重ねるごとに、感情豊かな語りを展開された。聴き手の質問に答えるだけでなく、主体的に語りを膨らませていたことから、ライフレビュー・プロセスにおける「想起」(Webster & Young, 1988)の機能は、十分に確認できたと考えられた。

聴き手のかかわりの中には、「評価」(Webster & Young, 1988)を促す応答や態度がみられた。#2では、ハイキングが現在の脚腰の強さに繋がっていることを聴き手から提言していた。#5では、ハイキングで養われた精神を傾聴することにより、最後まで切り切ることが子どもの心の成長に寄与したという語り手自身の気づきへと導いていた。

過去の経験が現在の自分や大切な人のありように影響していると認識したことは、語り手にとって、これまでの人生を肯定的にとらえる体験になったと考えられる。ライフレビューは、必ずしも語り手を過去に固執させるものではなく、過去の経験が現在、さらには未来へ繋がっていることを語り手に感じさせる営みであると示唆された。

語り手は、人生に「良いときも悪いときも」(#2)あったと振り返りながら、全体としては人生を肯定的に受け止めているようであった。ライフレビューが適応的に進展し、人生の「総合」(Webster & Young, 1988)に結びついたと考えられた。

本研究により、研修を受けた介護職員がライフレビュー面接を実施することの可能性が示された。さらに、研修やスーパーヴィジョンの実施など心理臨床家のサポートがあることで、より安全かつ効果的な面接を実施できると考えられよう。